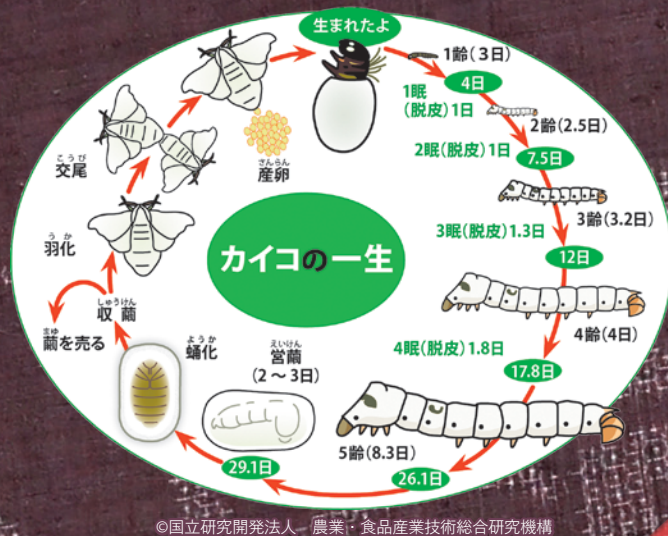


結城紬ができるまで

1 養蚕～真綿

カイコを飼育し、繭を生産する一連の工程を養蚕といいます。カイコは桑の葉を食べて成長し、やがて糸を吐いて繭を作ります。この繭が結城紬の原料になります。繭をお湯の中で広げ袋状にしたものが真綿で、ここから糸を紡ぎます。結城紬の着物一反分を作るには、繭玉約2,200個、真綿370～380枚ほどが必要になります。結城紬と養蚕の関係から、1980（昭和55）年に「桑」が市の木に選定されています。



2 糸つむぎ



「つくし」という道具に真綿を巻き付け、手でよりをかけず、一定の太さで糸を引き出し「おぼけ」にためます。一反作るのに約34kmの糸が必要になります。

3 管巻き

「おぼけ」に入ったつむぎ糸の集まりをポッチと呼びます。ポッチから糸車を使って管に巻き取ります。

4 糸あげ(総あげ)

管にとった糸を総あげ機に巻いて輪状にする作業です。糸を一定の長さに束ねることで、後の工程で扱いやすくします。

12 製品(反物)



着物を仕立てるのに必要な一反(長さ約12m以上)の完成です。制作期間は3カ月～1年以上かけて作られるものもあります。

13 整理作業(糊抜き)



反物を一晩お湯につけ、程よく糊を落としてから脱水し、伸子張りをして屋外で干します。紬本来の風合いが一層増します。

無形文化財として

結城紬(平織)は製作工程が40工程ほどあり、すべての工程が手作業によって行われています。この中で「糸つむぎ」、「緋くくり」、「地機織り」の3工程が、国の重要無形文化財およびユネスコ無形文化遺産になっています。文化財になっているのは「無形」であるため、結城紬の反物や着物そのものではなく、製作技術そのものであることが特徴です。

また、古来より、結城紬の生産は分業によって行われています。真綿から糸をつむぐ職人、糸を染色する職人、下ごしらえから機織りまでを行う機屋、反物(製品)を扱う問屋などです。結城紬の着物はとても柔らかで温かく、着こむほどに体に馴染んでいきます。結城紬は「結城三代」といわれ、親子3代受け継ぐことができるほど丈夫です。

6 整経



経糸(たていと)をのべ台で往復しながら、所定の長さで本数にそろえ、上糸と下糸を分ける作業です。

5 図案作成

色や模様の設計図で、特殊な方眼紙を使用します。伝統を生かしながらも新しいデザインが考案されています。

9 染色(たたき染め)

緋くくりされた糸を、台にたたきつけて染料を染み込ませます。結城紬独特の染色方法です。

8 緋くくり

墨付けした部分を、綿糸で1つ1つ縛ります。縛った箇所は染色しても色が入らないため、織りあげると模様として残ります。

10 下ごしらえ

経糸を機織り機にかけるまでの工程を終えて「下ごしらえ」といいます。糸は小麦粉を使い糊付けすることで、切れにくくします。

11 地機織り

地機という、原始的な織機で織り上げます。経糸は腰を使って張り、緯糸(よこいと)を強く打ち込んで織ります。

結城紬と教育

市では、青少年のうちから結城紬に慣れ親しんでもらえるよう、小中学校の授業に取り入れています。

結城紬体験学習

絹川小学校や城西小学校では、ふるさと学習の一環としてカイコの飼育を行っています。また、市内各小学校では、校外学習として市伝統工芸館を訪れ、糸つむぎや緋くくり、機織りなどを見学しています。



紬のふるさと体験授業

市内中学校3校では、授業として結城紬の着物の着付け体験を行っています。生徒は、着付けの前段として結城紬の概要について講義を受けます。ゆうき着楽会の皆さんの協力を得て着付けを行い、着用時の作法やたたみ方なども併せて学びます。

